
大海賊時代を変える漂流者

漂流者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大海賊時代を変える漂流者

【Nコード】

N8086Y

【作者名】

漂流者

【あらすじ】

家で普通に暮らしていた主人公。だがある日冷蔵庫を開けたらグルグル模様の変なバナナを発見した。それを食べて何事も無かったと思いきや、次の日起きたら海の中に居た。上は青空。周りには海、海、海。島が無い為そのまま漂流されてしまう。「これからどうすれば良いんだよおお！！」by主人公

1 流れ着いた場所（前書き）

作者名については気にしないで下さい。

1 流れ着いた場所

カリカリ・・・ペラッ

ん？誰だ？俺は今、数学の勉強中だ。ちよつと待て。

15分経過

カリカリ・・・パタン。

宿題が終わったから良いぞ？

俺は、渡部 蒼大。中学三年だ。俺の両親は今両方とも出張中だから居ないけどな。料理とか家事は得意だから困る事は無い。金は置いてくれたし。家計も安定中。

で、今台所に居るのだが。これは・・・？

冷蔵庫に何故か買っていないグルグル模様のバナナを発見。これつて、今世界中で大ヒットしている海洋冒険の「ONE PIECE」にある“悪魔の実”だよな？超似てるし。どうやって入れたんだ？まあ、それは良いとして後で食べてみれば良い。今はオムレツを作りたい。

ふう。できた。なんか変なメニューだな今日は。

オムレッツにヨーグルトに悪魔の実らしき物。

誰から見ても変だと思われるな。特に一番最後のは。

「いただきます。」

もぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐもぐ。

あと残りはこの変なもの。悪魔の実はクソ不味いと聞いたが。
ガブツ・・・もぐもぐもぐ・・・ゴクン！

う・・・不味っ！何だこの味。どういえば良いんだよこれ本物じやねえの？じゃなかったらなんだよこの果物。

いいや、明日のテストで寝ないようにもう寝よう。

（翌日）

クー。クー。クー。

「う・・・鷗？なんで鷗なんだ？俺は東京都の練馬区に住んでるから鷗は居ないと思うがな。・・・なんだよこれ夢？」

と思った。てかそれを願う。どうしようか。

？叩く

？殴る

？海の中に顔を入れて息ができるか確認してみる。

？助けを呼ぶ。

？寝る

あ、？は死亡フラグだ。やめておこう。？は意味が無いかもな。周りは海のみ。よし？に・・・あ？あのマークってワンピースの海軍のマークだよな？マジ？行こう・・・ぎゃああああ。流されるうつつ。

その方向だから良いけど。マジでもの凄いスピードで流されてるう

うつー!!ぶつかるうつー!!!!

え!?!ちよつと待った!!あの船首は!!まさか!ルフィのじいちゃん?まさか!。そんな訳無い。

「あ・・・ぶつかるうつうつうつー!!!!!!!!」

「何事・・・ええ!?漂流者!?おい!浮き輪!」

「おりゃあ!」

バチャ。

あ、浮き輪。これに掴まれって意味か。
ガシッ

「手を離すなよ。引くから。」

「OK。」

「よつ。」

どんどん軍艦に近づく。

「よつと!」

「大丈夫か?ほらタオル。」

「どうも。」

ああ。これが夢小説とかに出て来る“トリップ”ってやつか。なん

で俺がこんなのに体験してるんだよ。まあ、テストが今日だから良かったけど。

「なんじゃ？」

「あ、もしや。」

「うん？」

「ルフィのじいちゃん？」

「ルフィを知ってるのか！？」

「あ、まあ。」

「“麦わら”のルフィですか？それくらい知ってますよ。億越えル―キーなんですから。」

「そうか。でお前さんは？」

「俺は渡部 蒼大。今から質問しても良いか？」

「うん？いいぞ。」

「ここは何処だ？」

「ここは海軍本部の近海じゃ。今帰るところじゃ。続きは着いたらで良いかの？」

「分かった。」

着いた場所が軍艦かよ。夢であって欲しい。

あと、これを考えたら、あの実は本当かもな。

1 流れ着いた場所（後書き）

感想など待ってます。

2 主人公設定

【名前】

わたなべ
渡部 蒼大 そつた

【性別】

男

【出身地】

東京都練馬区

【誕生日】

2月29日

【身長】

184cm

【部活】

水泳部

【能力】

自然系ウミウミの実。

何故か家にあつた悪魔の実を食べて能力者になった。
これを食べってから海人間となったが、カナズチにはならなかった。

【その他】

- ・ 自分で何かを作るのは得意。
- ・ 狙撃が得意。
- ・ 元の世界の技術はほとんど覚えていて造ることも可能。
- ・ 体質が他の人と違う。

主人公は海軍にも海賊にも政府にも革命軍にも入りません。

大体、革命軍 + 海軍 ÷ 2 〃 主人公が行っている事。

主人公は大海賊時代を終わらせる事を目標にしています。

2 主人公設定（後書き）

こんな感じの主人公。

3 事情聴取

「ある部屋」

「??」私はボガードと言う。さっきの部隊の副官だ。」

「はあ。」

コンコンッ ガチャ。ゾロゾロ

・・・・・・・・・

なんか海兵がゾロゾロ入って来るんだけど・・・・。
あ・・・・巨人族だー！

「ふむ。全員集まったから初めていいぞ？」

初めて生で見たー！！でけー！

「・・・・・・どうした？」

「あ、いや、なんでもないです。」

「そうか。名前は？」

「渡部 蒼大」

「渡部そ・・・？」

「蒼大」

「変わった名前だな。」

「普通なんだけど。（違う世界だもんなー。）」

「何処の海出身だ？」

「・・・・・・・・・・。」

「どうした？」バリバリ

「煎餅食いながら喋んじゃねえ。」

「口悪いのー。」

「悪かったな。今はちよつとな。」

「（機嫌が悪いのか。）で、どこだ。」

「どこって何だよ。」

「一応聞いてみる。」

「東の海・西の海・北の海・南の海・偉大なる航路の5つのうちどれかだ。」

「ちよつとふざけてみよう！」

「何それ。東シナ海？大西洋？南シナ海？北極海？後、偉大なる航路って何？」

「貴様、ふざけてるのか？」

??「ちよつと待つて！」

「なんだ？日本研究班員。」

大仏が聞く。あ、大仏って、センゴクだよ。

「なんでその単語知ってるの?!」

「ごめん、ごめん。知ってるよ。でも、うーん。」

「ええ！？スルー！？・・・後で聞きます。」

「分かった。」

「何処だ。」

「うーん。東の海？」

「なぜ疑問系？」

「いいから次！」

「・・・年齢は？」

「14歳。」

「何故漂流していた？」

「あ、ちょっと待った。さっきの質問やっぱり答えるよ。」

「あ、はい。」

研究員が戸惑う。

「自己紹介からするよ。」

「ああ。」

「俺は渡部 蒼大。此处とは違う世界から来ました！俺が住んだ所は日本。日本の東京都練馬区に住んでいます。いつもは学校に通ってます。部活は水泳部。特技は狙撃と水泳と潜水？」

「ええ？！日本から来たんですか！？」

「うん。だ……あ、あれって本物なの？」

「え？」

「俺は昨日、冷蔵庫に悪魔の実らしき物があってそれを食べて寝て起きたら今の状況だから。」

「……嘘言ってますか？」

「俺、パソコンと携帯電話スマホと筆記用具とか持ってるぞ？」

ガラガラ。

不思議バックからどんどん出てくる出てくる。

「本物だあ。」

「てことは、渡部は異世界から来た。で良いんですか？」

ボガードがガーブに聞く。

「そうなるの〜。」ボリボリ

「……………ふ。」

「ふ？」

「ふえつくし！……………うう。」

「！？……………ビックリしたー。」

いきなりくしゃみしたから海兵が驚いちゃった〜。

「ごめん。風邪が治ってきてるんけどさ。」

「治って来てるかよ。」

「ははは……………はあ。笑えねえ。」

「……………日本について話してくれないか？」

「日本は47都道府県に分かれてる。あと、列島だから一応島国。先進国で治安は世界一。軍隊を持たないけど自衛隊がある。けど外

国からは軍に見えてる。とか？」

「ええ！？治安は世界一なんですか？！」

「うん。そんな感じ。」

「そうか。」

「センゴク！こいつを海兵にしたい！」

「子供か！？後、入隊しねーから！！！！！」

「なんでじゃ！」

「なんにも入らねーよ！でも情報通だから。」

「じゃあ、海軍が世話するから情報くれよ！」

「OK！」

ここで世話になるのか。まあ、いいや。

3 事情聴取（後書き）

次回はこの続きです。まだ続きます。

4 能力発動

??「おれはオニグモ。その悪魔の实の能力は分かるのか？」

「さあ？」

「意識してみい。」

「ああ。」

目を瞑る。悪魔の实の能力を考えてみる。

「しかし、おかしいと思わんか？」

「？」

オニグモが首をかしげている。（気配で分かった）

「漂流つて事は、海水に浸かってるって事じゃろ？なんでカナズチではないんじゃ？」

「確かに。」

分かったぞ！海だ！よし、空間に水があることを思い浮かべて・・・

「何！？」

目を開けると・・・空間に水が。どうやら海水じゃなくても水で

あれば良いらしい。

「自然系ロギアか……。」

「ただの自然系では無いぞこれは。」

「ああ。」

驚いてる中將ら。

「何かは、分かった。」

「なんだ？」

「自然系ウミウミの実。海人間だな。あー、俺動物系が良かったー
！！」

「良いじゃないのか？」

「まあ、多分体が海だから海水に浸かっても変わらないからだと思
う。でも良いか！」

「？」

「俺、水泳部だったからさ。潜水も目開けてもこれで大丈夫だあ！
よっしゃあー！」

「ぶわっはっはっは！息も続くぞ！」

「よっしゃあー！」

「さつきと全然機嫌が違う……。。」

「まあ、良いんじゃないの？」

「なんでだよ。」

「だって、俺ら海軍があの子の世話をするからよー、機嫌が悪くて能力でやられたらどうするんだよ。」

「あー！そっか！」

「だろ？」

「ああ。」

なんか話してる。。

「ふむ、早速行くか！」

「……………何処にだよ！」

「鍛錬場じゃ！」

「……………えー！！やだー！！！」

「行く」明日にしてよ。今日は寝る。「……………」

「寝るのかよー！！！」

海兵、今は突っ込まないでくれ。

「h・・・あ・・・部屋どこだー・・・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・付いて来い。」

「OK。」

「待て、俺も行く。」

「じゃあ、俺も。」

「・・・・・・・・」

ストロベリーって言う中將が無言。（あの帽子・・・頭が長い人。）

って、無言！？なんか喋れよー！！・・・あ、そうだこの人いつも無言だ・・・。

って、中將多くね！？中將しか居ないけど。

「ぶわっはっはっは！行つて来い！」

あんたは行かないのか！！

「置いてくぞ。」

「え？こんなに居るから・・・・・・・・判か。」

そつだよー！！中將って全員六式極めてる人達だよー・・・・。

「・・・・・・・・・・・・・はあ。」

これはもう、諦めるしかないのか。

（ ）（ ）（ ）そんなに嫌なのか・・・・・・・・・・・・・。（ ）（ ）（ ）

4 能力発動（後書き）

階段が苦手な主人公。

作者は逆です。東京タワーの階段を上りきった事が一回あります！

それでは、それでは。

5 背負う

あああああああああ．．．．．魂が抜けそう．．．。

「．．．．．」

「モモンガ、どうした？」

いきなりしゃがむモモンガ。

「背負ってやる。ほら、乗れ。」

「ふえ？」

いきなりだったから変な声が出てしまったではないか！このヤロ
〜！

「背中に乗れ。」

え？それってつまり、俺をモモンガがおんぶするって事？まさかー！

「早くしろ。」

現実だったあああああ！！！！！！！！！

「何固まってる。ほれ！」

どんっ！

「うわっ！」

「ふう。やっと乗ったか。すまないドーベルマン。」

「お安い御用だ。」

「押すなよ！」

もう、中將らは階段を上り始めてます。

「乗らないからだろ。言ったら避けるだろ？」

「だって……よ。」

「いいからそのまま背負われてろ。」

「うう……。」

うん？この髪長くない？

「てか、髪長いなー。」

「髪は大事にするもんだ。」

「切らないのか？」

「別にこのままで良い。」

「あーそう。・・・まだ？」

「少なくとも10分はな。」

あー、なんか眠くなってきた・・・。

「・・・・。蒼大？」

「ZZZZZZZZZZ」

「寝てるぞ。」

「寝てるのか。」

「モモンガの肩を枕にして髪を布団代わりか？」

「そうだな。暖かそうだ。」

「羨ましいと思うなら今度頼んだら良いだろ。」

「髪が長くないから無理だ。」

「人獣型になれば良いだろ。」

「そうか。」

「部屋に連れて行くか。」

「モモンガの部屋で良いだろ。」

「いや、それは駄目だ。」

「まあ、蒼大は大事にしないとな。」

「そうだな。」

「……………」

「なんか喋ったらどうだ。蒼大もそう言っこいつてたぞ。」

「……………喋る事が無いから喋っていない。」

「……………もつと明るくなれよ。」

「一番地味では？」

「そうだな。」

「酷いな。」

「お前キャラ変えろ。」

「無理だ」

「あつそ。」

「着いたか。」

「蒼大は俺らと同じ階なんだな。」

ガチャ

「蒼大の世話は中将以下が担当だ。」

「だからってな。同じくらいの部屋だよな。」

「だな。」

「手伝ってくれ。」

「ダルメシアンは足を持て。靴も脱がせておけ。」

「ダルメシアン、お前意外と器用なんだな。」

「うるさい。」

と言って靴を脱がす。

「ここだな。同じ造りだな」

ガチャ

寝室を開けるモモンガ。

中将らは蒼大をベットに寝かせて布団を掛けた。そして、部屋から

出て各自の部屋に向かう。

ちなみに、この階の部屋は巨人族以外の中将のみしか居ない。だが
ガープとつるは上の階に居る。この階の造りは、

資料室 休憩場所

空き部屋

I

カイゼルヒゲ オニグモ ヤマカジ ストロベリ

上下階段

雑談・色々部屋

コーミル ドーベルマン 蒼大 ダルメシアン
モモンガ

こうなっている。

蒼大は完璧に守られている。

ジョナサンは拒否している（と言う設定）為造られていないです。

5 背負う（後書き）

図が少しずれてますが、ぴったりくっつける事ができないのでご了承ください。

6 海賊の唄

中将らが蒼大の部屋から出てから2時間後。

「ん？どこ？あ、紙だ。」

えーと？

ここは蒼大の部屋だ。ここの部屋は自由に使うと良い。

中将一同

・・・・・・・・・・・・・・・・。ああ！！そうだった！モモン
ガがおんぶしてくれてたんだ！！ああ、ありがたやー！・・・・って、
どっかのおばさんか！！

一人漫才ってつまんねー。てか、俺、漫才の才能ねえし。

なんか歌おうかな。あ、窓開いてる。

ヒョコッ

「うつひょー！！綺麗だなー！！」

海が綺麗。

ドーベルマン side

蒼大を寝かしてから2時間が経った。

「あいつまだ起きないのか？そろそろ起きてもいいと思うのだが。
あと、何でお前らが此处に集まる。」

「いいだろうが。蒼大の部屋にも近いし。」

「そうだな。」

ガラガラ。

すると窓の扉を開ける音が。此处は開けてるから隣だろう。

「蒼大か？」

「そうだな。」

「うつひょー！！綺麗だなー！！」

「完全に起きたな。」

「やっとか。」

蒼大、遅すぎだ。

ドーベルマン s i d e o u t

蒼大 S i d e

「あ、でも大砲が邪魔だな。コレ。良い景色なのに。」

あー！ピンクスの酒歌おう！

「ヨホホホ〜ヨホホホ〜♪・・・」

あ、モモンガ達が隣に居るみたい。でも気にせずに歌うもんねーだ！

「ヨホホホ？」

「ヨホホホ〜ヨホホホ〜♪・・・」

「なんだそれ。」

「ピンクスの酒を届けにゆくよ♪ 海風気まかせ波まかせ♪」

「ピンクス？」

「の酒？」

「旨いのか？」

「知らん。」

「潮の向こうで夕日も騒ぐ、空にや輪を描く鳥の唄」

「??」

「さよなら港、つむぎの里よ、ドンと二丁唄お、船出の唄」

「これって……。」

「金波銀波もしぶきに変えて、おれ達やゆくぞ、海の限り」

なんか俺の声、島に響いてる気がする。

「これって、蒼大の？」

「それしかないだろ。」

「ビnkスの酒を、届けにゆくよ」

「知ってるぞ。海賊の唄だ。」

「はあ？そんな訳……」

「我ら海賊、海割ってく」

「……。。。」

「だろ？」

「波を枕に♪ねぐらは船よ♪帆に旗に蹴立てるはドクロ♪」

「それにしても何故、この唄を？」

「嵐が来たぞ♪千里の空に♪」

「さあな。」

「波がおどるよドラム鳴らせ♪」

「あいつ、海軍側だろ？」

「おくびょう風に吹かれちゃ最後♪明日の、朝日ないじゃなし♪」

「蒼大アイツの事は、」

「ヨホホホ♪ヨホホホ♪ヨホホホ♪ヨホホホ♪」

「よく分らない。」

「ヨホホホ♪ヨホホホ♪ヨホホホ♪ヨホホホ♪」

「まあ、確かに。」

「ピンクスの酒を届けにゆくよ♪今日か明日かと宵の夢♪」

「例えば、」

「手を振る影にもう会えないよ♪何をくよくよ明日も月夜♪」

「階段が苦手とか。」

「ビンクスの酒を届けにゆくよ♪ドンと一丁唄おう船出の唄♪」

「遠慮するとか。」

「どうせ誰でもいつかはホネよ♪果てなしあてなし笑い話♪」

「意味分らない言葉言ったり、」

「ヨホホホヨホホホ♪ヨホホホヨホホホ♪」

「いきなり大声だすし。」

「ヨホホホヨホホホ♪ヨホホホヨホホホ。・・・ふう。しかし、」

「ん？」

「これ、ここで唄っても良いのか？」（汗）

「……………」

「此処、海軍本部じゃねえか……………」（汗）

「やっと、気づいたか。」

「やべー。でも良いか。」

「おい!どうした!」

ん?

「良くねえ!」

「うおお!!!なんだよ!びっくりした!」

「……すまん;」

「いやー、こちらこそ。」

うん、大体、海軍本部で歌うのが悪いんだよ。でも、気にしな—い!

俺、ある意味問題児かもな。

6 海賊の唄（後書き）

海軍本部で海賊の唄を歌っちゃいました^^

7 新たな能力発見

「あ、そういえば今は原作の何処ら辺かな？でも一億超えてるってことは……」

コンコンッ

「どうぞ。」

ガチャ

「ルフィ達がアラバスタから出たって事で、エースにも会ったのか。」

「……麦わら？」

「確か、次は……えーと……。」

「ルルカ島だ。」

「違うよ、ファイアーワークスだよ。……って、誰……あ。さっきはどうも。」

「ファイアーワークス？」

「花火が有名な島。」

「麦わらの情報が結構あるみたいだな。」

「まあ、大丈夫だよ。」

「何故だ。」

「え？だって・・・次の次の次の次に・・・」

「何回言った？」

「六回」

「居たの！？」

「居ても存在感無いからな。」

「みなさん酷いですよ。」

「まあ、ナバロンに着くからさ。」

「でもな、ナバロンって。」

「海賊があそこに行くか？」

「上から落ちてくるから無理でしょ」

「上からって・・・。」

「突っ込むな！！それ以上は教えない！！」

「まあ、大丈夫だよ。」

「まあ、良い。蒼大、日用品はどうするんだ？」

「あ、大丈夫だよ。」

「そうか。」

「うん。届いた。」

「は？」

どーーーーーーーーん

いつの間にか部屋にはダンボールだらけ。

「いつの間に…………。」

「三次元は「いや、多分それ違うよ。」??」

「此処に来たからじゃない？」

「知らん。」

「だよな…………。」

「無口になるな。」

「お前だけには言われたくない台詞言われた…………!!!!」

「蒼大、お前私の事をどう見てる。」

「えー、無口で地味で何故か笑顔の人？」

「まあ、確かに。」

「俺もそんな感じだ。」

「普通に考えてもそんな感じだろ。」

「うんうん。」

「そんなに……。」

「やっぱり、キャラ変えろ！」

「無理です。部下が引きます。」

「ははは……でも少しくらい喋れば良いのに。」

「……………」

「今喋れよ！！俺らしか居ないのに！！」

「いや、居る。」

『クーー！！』

「ニュース・クー！本当に居るんだなー！」

てか、カモメが居るだけで無口になるか？

『クー！（タダで良いよ！）』

「え？マジ！？」

『クー？（言葉解るの？）』

「うん。今気づいたよ。」

『クーー（あ、これ。』

「Thanks!!」

『クーー（これが仕事だからね。（』

「あ、そうだったね。」

『クー（うん。』

「あ、鰯いる？」

『クー？（鰯？）』

「うん。ほいつ！」

パクッ

『クー！（美味しい！）』

「えへへっ。俺の故郷に居る魚の一部だよ。」

ク？（明日も来て良い？）

「いよいよ」

「クウーーーー！！！！（じゃあ、また明日！）」
「バサッ」

海兵達「「「「会話してたああああああ！！！！」」」」

[illegible]

「後者、無言!？」

海兵達「「「「「そこ! ?」」」」」

「……なんか解っちゃった。」
（汗）

[illegible]

「てか、なんで居るの？」

「あ、唄聴いて確かめる為に。」

「あ、俺だよ。」

「やっぱり。」

新たな能力発見。

（今、ニユース・クーと喋ってたよな。）

（三次元の能力じゃね？）

（研究員に聞いてみるか？）

（そうだな。）

（何だ今のは。）

（知らん。）

（あいつも分からないって顔してるぞ。）

（しばらく置いておくか。）

（それしかないだろ。）

7 新たな能力発見（後書き）

最後、ちよつと書き方変えてみました。

8
英語禁止

「あのさ、俺三次元に居た時、こんな能力無かったから!!」

「ええーじゃあ、今のは？」

「知らねえ。」

「ええええー」。

「まっ、平気や！」

海兵達（（（（（適當・・・））））

「そういえば書類片付けてないな。行かなくては。」

「おっと、忘れてた。」

「忘れちゃ駄目だろ。」

「うるさい。だったら帰れ。お前らもだ。」

「失礼しましたー！！！！！！」

「こちらも歸らせて貰おう。」

「なんかあったら呼べよ、蒼大。じゃあな。」

ボタン

「あ、ごめん。気をつけるよ。」

「それでは。」

ボタン

まさかの洋楽禁止？俺死ぬわ。洋楽好きだからさ。邦楽って・・・
・うん。なんかそんなに好きじゃない。ほとんど恋系ばかり。K
・POPも好きじゃ・・・てか無理。韓国の音楽はゴメンだ。
韓国のキムチは美味いけど。（作者の意見です。無視してください。
）

でもな、洋楽禁止ってなんだよ。

ガチャ

「ちよつくら資料室行って・・・」

ゴッソ

「イテー。」

「うん？蒼大か。」

「あーどこ行くの？」

「資料室だが。」

「俺も行つていい?」

「ふむ。……………良いぞ。」

「ありがとう」ガバツ

「なっ! くっ付くな!」

「懐いたな。」

「黙れ!」

「はわっ! あー! ゴメン!」

「いや、良い。行くぞ。」

資料室は奥にある。

『図が5話の最後にあるよ! b y 作者』

うん。ある。

ガラガラ

「蒼大、約束を破らなければ見せてやる。」

「約束？」

「ああ。ここの情報を民間や少将以下には喋るな。良いか？」

「ああ。約束する。」

「なら良い。見ても良いぞ。お前のIDはすべての資料を見ることが出来る。」

「おお！すごい。」

「……………」

「えーと？あ、あつた。」

「うん？英語禁止についてか？」

「おう。俺さつき洋楽歌つてたら注意されてよ。天竜人は知ってるけど、この法則は知らないよ。」

「1週間前に作られたからな。」

「へー。」

内容は、天竜人が三次元を恐れて国際語の英語を書き読みを禁止。もちろん洋楽も禁止。ってところだ。

「恐れるって……………」

「最近、外国で改革が起きてるからではないのか？」

「いや、あれ、アラブだよ。」

「？」

「中東だからな。まあ、日本も経済で関係してるけどさ。そっかヨーロッパに近いから？」

「ふむ。そうか。」

「そっちは？」

「ああ、これはな。『革命軍』についてだな。」

「あー！あれ！」

「やっぱり、何か知ってるだろ。」

「うん。幹部の人達はほとんど帽子・・・動物の頭みたいな帽子を被ってるけど。なんかの流行？」

「それは初耳だ。蒼大、お前何か分かったら『情報書』に書け。今回は俺が書く。いいな？」

「OK！」

「うむ。もう良いか？」

「いや、まだここに居るけど。」

「俺はもう戻る。じゃあな。」

「おう。」

9 捜査

あれ？俺、何で此処に居るんだっけ？忘れ・・・ああ！もう調べ終わってんじゃない！

さっさと戻ろ！

ガラガラ

ゴツンッ

「イテーーーー。」

また、誰かと衝突したよ！！誰だーーーー！！！！

「うん？おお！蒼大！！！」

あー！！ルフィのじいちゃんにぶつかったよ！なんかいつもより痛いと思ったら・・・。

「どうした？なんで此処に居るんじゃない？」

「あー、英語禁止について。」

「おお！それが！」

解ってんの？この人。

「それじゃ、俺戻るんで。」

「ガハハ！じゃあの〜！！！」

手、振ってるし。一応振り替えしておく。

「部屋」

「……やる事無い！！！！！」

マジでどうしよ……。探検しようかな？と言っても海軍本部内な
んだけど。行ってみようかなー？

よーーーーし！行こう！あ、でも、許可要るの？……分かんね
ーーーー！！！！

バンッ

「うおっ！！！」

いきなり、扉を開けたら……

「ん？どうした？」

中将揃って俺の部屋の前に居ました……。 (汗)

俺なんかしたか……。?

「何してるの?」

「ああ。ガープさんを探している。」

「ああー!! 資料室に居たぞ。」

「何?!」

「うん。出ようと思ったらぶつかったし。」

「お前、ぶつかり過ぎだろ。」

「うるさい!」

「とにかく、情報ありがとうな!」

「あー、やっぱり、サボってたんだな。」

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・!? 蒼大君?!」

「あ、ボガードだー!」

副官なんだよな。ガープの。

てか、今更だけどさ、俺、呼び捨てしかないよね？多分、直すの無理だわ。

『こつちだって癖を一応直したわ！！ボケエ！！b y 作者』

うお！？どうした！？

『まあ、感想で書かれたから書き直したんだけどさ、「」の前の一文字。あれ、癖だからさ。でも、直したぞ！全作品はまだ直してないけど……。b y 作者』

直せよ！！

『お前が直せ！！な・お・せ！！！b y 作者』

なんだとーーーー！！！！！！！！！！すみません。無視してください。ただの口喧嘩です。見ても解るか。

あ、出てこなくなった。

「ガープさん！何サボってるんですか！！！！」

「大変だね。」

「まったくです。あと、ありがとうございます。」

「まあ、蒼大が居場所を教えてくれたし。」

「何！？教えたのか！？」

ガープが驚く。

「わしに優しくしろ！なんで、最近の若者は……。」

「お前を年寄りって思ったことは一回も無いよ。元の世界でも。」

「なんでじゃ！」

「だいたい、年寄りが砲弾投げてる時点でおかしいから！」

だって、年寄りが砲弾持つ時点でもおかしいけどさ。投げてるんだよ？

「はあ！？酷いのー！！」

「年寄りはおとなしく書類でも片付けてろ！！」

俺、年寄りはなんか……ちょっと苦手なんだよ。

「何！？」

「蒼大君の言う通りですよ？ガープさん？」

「わし……泣きたい。」

「キモイ。」

酷い言葉炸裂しそうなんだけど。

「うう．．．．。」

「『『『『．．．．．』』』』』（苦笑）

これには、ボガードも中将らも苦笑いだ。

「マジでやめろ。ジジイが泣いて、何が得する。ここに通ってる海兵も引いた顔してるぞ。」

「ガープさん行きましょう?」

「．．．．。」

あ、黙った。

「さあ、楽しい楽しい書類片付けの時間ですよー!! 行きましょう
」!

「．．．．．。」

マジで泣きそうな顔してるよ。お願いだからやめてー!!

海兵達、非難してるよ。（笑）

捜査。

（なあ、今の顔．．．。）

（おう、引くよな。）

（うん。あと、蒼大君。）

（言葉が・・・。）

（あれ言われたら、傷つくよな。）

（特に、心が。）

（ああ。）

9 捜査（後書き）

最後、この書き方で行こうかな？

途中で書いたのは事実です。癖なんです！

酷い言葉は言わないように気をつけましょう！！！！

10 大宴会（前書き）

今日の夕飯はすき焼き！旨かった。

10 大宴会

それから4時間後。

「あ、お疲れさんです。」

「ああ。蒼大君。」

ボガードがガープを連れて来ていた。

「どっか行くの？」

ガチャ。ガチャ。ガチャ。

隣と隣と隣の隣の部屋のドアが開いた。

「ああ。ボガードか。」

「ええ。先程は、どうも。」

「なあ！何かあるのか！？」

一応聞いてみる。でも、こんな事は会議ぐらいだから期待はしていないけどね。

会議の日は海軍本部全体が騒がしい。特に七武海が集まる時はいつもの会議より騒がしい。

「私は、ガープさんが「大会議室に行く！」って言ったので逃げな

いように付いて来てるだけです。」

どう見ても、引きずって連れてってるしか見えないけどな。それほど、心配なんだろう。

いつも何かの理由を付けて逃げたり壊したりする、逃走破壊魔王みたいな者だし。

逃走破壊魔王はそのままの意味だ。

「何じゃ！別に良いじゃろ！宴会ぐらい！」

さすが、フーシャ村出身の人だ。あそこは宴会好きだもんな。ルフィもそうだし。

ん？宴会？

「今、宴会って言った？」

「そうじゃい！」

「どこで？」

「大会議室だろ？」

ドーベルマンが答える。

「そうです。」

カツカツ。

「行かないのか？」

「あ、雲。」

「雲ではない。せめて蜘蛛にしろ。」

少し、ふざけただけなんだけどな。

そういえば、気づいたか？

口調（声に出さないバージョン）がちよっと変わったって事を。

本当は変わっていない。元に戻っただけだ。

そんな事は置いといてくれ。・・・間違えた。気にしないでくれ。

「オニグモ。宴会行くのか？」

「当たり前だろ。」

何が当たり前だ。宴会が当たり前ってなんだ？

「行くぞ。」ガシッ

「お、おい！」

モモンガが俺を抱き上げる。そのまま連れて行くらしい。

「モモンガ、独り占めは反則だぞ。」

なんか喋っている。

ちなみに今のメンバーは、

ガープとボガード、オニグモ、モモンガと抱き上げられている俺、
ドーベルマン、ダルメシアン。

こんな順番で横一列に並んでいる。

横幅は広い為、横一列に並んでも邪魔にならない。

「これは早い者勝ちだ。」

「今度はおれが勝つ。」

いい加減にしろ。

「蒼大は物では無いぞ。」

やっと正論を言ってくれたよ。

「もうすぐ着くぞい！」

「ガープさん。暴れないで下さい。思いっきり引きずりますよ？」

「それだけは勘弁してくれ！ボガード！」

大変だな。あの二人組は。^{コンビ}

スススーーーーーッ

此处、扉ではなく、襖でした。

「あ、遅いですよ！」

「おい、敬語を忘れるな。」

「良いじゃろ。宴会の時ぐらい。」

大会議室と議事の間を合体させて出来た。超広い部屋で宴会を開くそうです。

「遅かったな。私が司会をしたいと思う。」

センゴクが司会をするらしい。

「始めに誰か挨拶を。」

しーーーーーん……

一気に静かになった宴会場。

「誰か居ないのか？」

「わしは嫌じゃ！」

俺だって嫌さ。

「モモンガ！やれ！」

「ガープさん。斬りますよ？」

「どうしたんじゃ！落ち着け！じゃあ……蒼大！！お前

「がやれ!!」

「やめろ。てか、誰が主役だ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「それは・・・センゴク!誰じゃ!」

「ガープだろ。」

「わし!?わしなのか!?!」

「お前かよ。」

この人には、呆れた。

「しっかりしてくださいよ!ガープ中将!」

海兵達からも苦情が出てきた。

「う・・・それじゃ!わしのためによく集まってくれた!乾杯!」

「乾杯――――!?!?!?!」

「俺飲まないからな。」

「当たり前だろ。日本研究員から強く釘を打たれたからな。」

「ハハハ・・・。」（苦笑）

少し感謝しよう。

「おい、さっさと飲め飲めっ！」

ん？オニグモか？いつもの感じと違うが。

「？どうした？」

ヤマカジが聞いてきた。ちよっくら聞いてみるか。

「オニグモがさ、いつもなんか違うなーって。」

「ああ。それか。あいつは酒を飲むと陽気になる。変わり方が面白いんだ。」

「確かに凄い変わり方だな。」

「だろ？」

すると本人がやって来た。

「何の話だあ？ヤマカジ、蒼大。」

「お前の話だ。」

「そうそう。」

「おれの？」

「ああ。」

「うん。気にするな。」

「蒼大の言う通りだ。それじゃあ、楽しんどけ。」

「おう。」

ちよつと、今日資料室で確認した事を報告しておく。

今回は世界の税についてを確認（調べた）。

ここの世界は、“消費税”のみだ。ってことが分かった。

これだけでも驚くが、もっと驚くのがある。

消費税が平均80%と言う脅威の数字。

だが、今年にまた5%プラスされるようだ。

これじゃあ、世界中で反乱が起きてもおかしくない。

これに耐えてる人達はある意味凄い。尊敬してしまいそうだ。

俺なんか、5%から10%に上げられそうな日本の消費税に怒って
いたし。

俺だったら、何か起こしている。

それで、まだ資料を全て読んでいないからまだ実行しないが、ある
計画を立てている。

それは後ほど。

10 大宴会（後書き）

あれば、一言欄に感想とかくください。

11 視察決定

「おいおいおいおい。蒼大や！ジュースでも良いから飲め！飲め！」

最初がウエザリアに居るハレダスみたいな口調になっているのは、少し酔っ払っているこの宴会の主役、ガーブだ。

「聞いとるのか？」

「聞いてるよ。二日酔いに気を付けろよ。」

「そんな事分かつとるわい！」

大声で言いながら中央へ行ってしまった。相変わらず勝手な人だ。

それから3時間後。

センゴクが、マイクを持った。

「明日も仕事がある。だからもう、宴会は終了する。」

[illegible]

「ワシハ、センゴクニタイシテハンタイスル。」

ロボット口調で喋るガープ。

「ふあゝ。．．．もう、10時じゃねえかよ。俺、寝る準備するか」

ら。おやすみ。」

「ええ！？行くのか！？」

「眠いんだよ。おやすみ。ふあ。．．あ、風呂入らないと。」

言った通り、眠い。

元の世界では、夜中の2時に寝ることが多い。

でも、ここでは時間の流れが遅いのか早いのか分からないが、明らかに元の世界と此処の世界の時間の流れが違うのは分かる。

ガチャ

階段が苦手な俺でも一階ぐらいだった為、普通に帰れた。一階って言うても、元の世界と同じ高さにすれば、6階分ある。だから、この世界の階段は流石にキツイ。

「とりあえず、風呂入るか。」

「なんだこの風呂の広さ。」

家の湯船の（都内平均）4倍は軽く超える広さはある。この広さには唖然とした。

しかも、お湯が入れてあった。誰かが入れてくれたのだろう。

俺の座高の記録を見てか、湯の高さが湯船の半分以下になっている。半分以下でも、ここは身長がデカイ奴ばかりだから、結構ある。

しかも、ここは群島世界だ。

だから、海の面積は大地の面積をはるかに超える。

その為時間が流れても航空機を造るとかしようとしない。

滑走路を造る技術も無い、造っても管理が大変だから行わないそうだ。

と、言っても航空機の設計図が描けない。

しかも、海だらけだから船しか思いつかない。

在っても東の海は大丈夫だろうけど他の海の気候の変わり方が激しい為、要らないと思う科学者が多いそうだ。

ボタン

「気持ち良かった。」

「それは良かった。」

「……………」

なんでカイゼルヒゲが此処に居るんだ？

「何故、居るか。と、思っただろう？それはな、誘いだ。」

「誘い？」

ドライヤーで、髪を乾かしながら聞く。

「本当は海軍が国に行つて視察を行うのは反則なのだが、特別に許可がでた。国王は拒否していたがな。その国は独裁政治を長年行っていた所。国民が耐え切れず世界政府に訴え、政府が海軍に視察

して来い。と、言うもんだから、俺らもだが海兵は護衛とし、海兵でも政府の役人ではない人に頼もうとしているんだ。それで、候補に挙げたのは、蒼大。お前だ。今日来たばかりで戸惑ってるかもしれないが、行ってくれるか？拒否権はもちろんある。他にも候補がいる。・・だが、蒼大は有力候補だ。許可してくれるなら、是非お願いしたい。」

と、言って頭を下げるカイゼルヒゲ。

俺は元々この世界を変えようとも思っただから最初の一步として行きたい。

「頭上げてよ。」

「・・・・。」

「行くよ。」

「本当か!？」

「うん。」

だつて、どんな状況なのかも知りたいし。

「分かった。明日10時に出航する。世界政府の軍艦だからシンボルマークが描かれた帆で分かるはずだ。いつも何時に起きてるかは知らないが、8時半には起きろ。ミーティングを行う。良いな？」

「分かった。」

「よし。本当にありがとうな。」

行ってしまった。たぶん、報告だろう。

それにしても、今日来たばかりなのに、俺が有力候補が。意外でしょうがない。

明日は8時半起きか、もう少しゆっくりしたかったな。まあ、艦で寝れば良いか。

今日は早く（元の世界より遅い可能性があるが）寝よう。

此処の世界で現在の時刻23:34

もしも、同じだったら体内時計が狂ってるだけだな。

11 視察決定（後書き）

こんな感じで進める予定です。
変ですか？

12 準備

「――――!!」

「ん~~~~。」

「起きろ! 8時半過ぎたぞ!!」

「ん~~~~。」

パンツ

「まだ起きないのか? もう、40分だけだな。」

「いつもは結構寝てる可能性ありそうだな。よし、スプレーで、」

シャツ

「ぎゃあ!!」ガバツ

起きた場所は会議室だった。

パツ・・・・・・ドテツ

「イテェー。」

「大丈夫か?」

「しかも、此処会議室？」

携帯電話を見ると、10:40だった。どうやら、此処は2時間遅れのようだ。

「ああ。それじゃあ、今回行つのは国の調査。表向きには視察だ。」

何故か此処にCP9のジャブラも居る。

表向きには視察だから、裏もあるってこと。それはスパイにとって慣れた仕事だからジャブラが此処に居るのだろう。

会議室に居るメンバーは、右からカイゼルヒゲ、コーミル、モモンガ、俺、ジャブラの5人。

「裏は国の調査。出来れば、国を潰しても良いそうだ。名前はヒューガ島にある“ヒサンガ国”だ。」

名前が微妙だな。

ヒサンガ国って、文字を変換すれば悲惨が国。分かりやすく言えば悲惨な国って事だな。国名で伝えようとしたんだな。

「今回は、CP9のジャブラ氏にも参加している。今から、担当する事を言うからよく聞け。」

こちらが説明しよう。

中將ら三人は今回の原因でもある、国にうようよと居る海賊捕獲。ジャブラは国に潜入し国王を。

俺はそれ以外。

「ん？なんで俺はアバウトなの？」

「決まったら、バレルだろ。」

「あ、そっか。」

こういうのは初めてだからな。成功するか分からない。

「現在の時刻は9時20分か。蒼大、お前は朝食を食べて来い！準備は出来てる。」

「おう。」

早めに食べて戻るか。

12 準備（後書き）

今回は短めです。
次回は長い予定。

13 視察と拠点地（前書き）

軍系で変える訳ではなく、三次元の技術力で変えようとしている主人公です。

13 視察と拠点地

俺は食堂で食事を済まし会議室に向かっている。

ちなみに食べたのは間にツナマヨが入っているサンドウィッチだ。

サンドウィッチの中で一番好きなのはツナマヨサンドウィッチだから、嬉しかった。

余談は置いといて、さっき言ったのを取り消して欲しい。

「会議室に向かっている」ではなく「会議室に居る」だ。

「戻りましたー！」

「ん？あ、帰ってきたか。行くぞ。」

いきなり何言い出すんだこのジャブラは・・・。

「へ？」

「もう、出航出来るってよ！」

「出航準備OKって事？」

「おう。」

「そつなの？」

「そつだ。」

「俺は信用できないのか！？」

狼男、もといジャブラは信用されてないと思い、ショックで言葉を失っている。

まあ、思っていないが。

「さっさと行くぞ。」

「分かった。」

「軍艦」

今は、与えられた部屋で着くまでゴロゴロしている。（30分）
後、ヒサंगा国に着いてから何しようかと考えていたが、やっぱり三次元の力を借りれば良いと思った。

産業革命以前と同じ技術力の所と現在の三次元の技術力で戦ったら明らかに後者が圧勝する。その為、リュック（無制限に入る）に火薬を詰め込んだ。コピー出来たら良いなー、って思ったりしたが、その必要は無かった。どうやら、俺は悪魔の実をもう一つ食べてたらしく、コピー能力の実だった。でも、あまり使いたくないな。なんとなくだが。火薬とかはコピーしたい。材料（金も含まれる）だけコピーすることにした。あと、電力発電機が出来るまで電気もコピーするが。自分は技術力にしては自信がある。

この30分の中で何か造れるかって話だが、此処では大きな機械は造れない。何処かに仮倉庫を建ててるしかない。だから仮倉庫の材料を製作中だ。

倉庫は仮設住宅みたいな建物だ。違う点は大きいのと天井が高いのみ。

コンコンッ

「開いてる。」

ガチャ

「ヒサンガ国にまもなく到着しますのでご準備を。」

海兵が到着の知らせを言いに来た。

「30分かかる予定だった気がするけど。」

「はい、予定では海賊などの妨害があった場合を考えてましたが、
そっういのは一切無かつたので。」

「あ、そっうい意味か。」

「はい。準備が出来たら外へお願いします。」

「分かつた。」

「失礼しました。」

準備する……あ、材料をリュックに入れないと。忘れてた。

部屋から出て、軍艦から降りると4人が待っていた。

「ギャハハハ！遅いぞー！」

「うるせーよ。」

「ギャハハハ。」

「今から実行する。此方は海賊を捕まえる。終わったら、警備と情報聞きだ。以上！」

ジャブラが王宮に向かう。

俺は視察って事で、海兵達と一緒に町へ。

中將らは海賊を。

ジャブラは事前に王国兵士の志願届を出していたから行ったら確認してすぐに王国兵士になっていていつも通りにしているだろう。（王国の情報聞き）

俺は事前に此处に来て国の道などを把握している護衛海兵と一緒に国の視察に行っている。

「あ、肉まん。」

「ああ、その肉まん屋は美味しいですよ。」

護衛海兵は10人居るから、俺を含めて11人か。

「おっちゃん、肉まん11個。」

「11個な。おや？この前の君らは海軍さんだったのか。」

「はい。」

「俺ら今、視察中なんだ。」

「そうか。世界政府が命令したんだろうな。」

「まあ、この国を変えるまで此処に居るかもな。」

「そうかい。よし、じゃあ、タダで貰っとけ。特別だ！」

「ありがとう。」

「一つずつ包んでおいたからな。」

「ああ。」

「仕事頑張りな。」

「はい、肉まん。」

「どうも。」

「もぐもぐ。美味しい。」

「有名なんですよ。でも、税率が高いみたいですし。」

「へー。ちょっと聞いてみるか。」

そこら辺を歩いてるおじさんに聞く。

「ちょっと、おじさん。」

「なんだい？視察？」

「そうだけどさ、税率ってどのくらい高いの？」

「9割あるよ。90%。高くて生活できないよ。おかげで放浪民さ。」

「そうか。ありがとう。」

「いつでも聞きな。力になってやるよ。」

昔の言い方だと、九公一民になるよな。これはきつすぎだろ。

こういう国があるから世界平均が80%なんだな。しかし、90%はヤバ過ぎだろ。

いくらなんでも死ぬぜ。インフレがやばそうでちょっと怖い。

視察が終わり、丘を発見した為、そこに向かう。

王宮には気づかれないように林の裏に仮工場を建てるから問題無し。

「蒼大さん。」

「ん？」

「何してるんですか？工場？」

「そうだけど。」

「僕らは軍艦に戻ります。」

「分かった。」

軍艦はこの丘の後ろに停泊している。

ちなみに軍艦は全部で6隻。全て海軍軍艦だ。世界政府の船はデカイから目立つが、

海軍なら海賊を捕まえてるという事で済ませる為、海軍軍艦で来てる。

もし、何か発見したら後ろに停泊している軍艦に向かえるし、情報なら電話で伝えれば良い。

携帯電話で、電伝虫の番号に掛けてみたら繋がったから問題は無い。反対でも成功した。

「よし、工場完成。」

中はちょうど良い温度を保つようになってる為、生活しやすい。

『プルプルプルプル、ガチャ』

「ジャブラ？」

『おう。おれだ。』

「何か、分かったのか？」

『いや、違う。情報が前より聞きやすくなったから連絡した。』

「なんで？」

『おれが、軍隊の小隊長になった。』

「ああ。成る程。」

『分かっただろ？』

「ああ。引き続きよろしく。俺も拠点が出来たから。」

『何処だ。』

「林の裏にある丘。後ろには軍艦が見える。」

『そこか。気づかれない所だから大丈夫だ。』

「そうか。じゃあな。」

『ああ。』

ジャブラは小隊長になったようだ。

俺は偵察ヘリARH-70（アメリカ軍）、OH-1（陸上自衛隊）を製造中。

これで行けば国中が混乱するだろうけど、国民には伝えてあるから演技をして貰うことにした。混乱しなければ疑われるからな。

鉄系はリユックに大量に収納してあるし、無くなればあまり使いたくないと思ったりするがコピー。あまり、コピーはしたくないんだよね。でも、足りないし、鉄鉱石が発見されてないから無理。だから悪魔の実の能力に頼るしかない。

それから8時間後。

ARH-70とOH-1が完成。

もう、18時だ。だが、食料は問題ない。もう、林で鹿をトラップで捕まえて焼いている。

このヘリは本当は存在しない空間に保管しているから見つかる事はない。

ブルーノの能力に似ている。

『プルプルプル、ガチャ』

「モモンガ？」

『蒼大。お前、丘に居るだろ。』

「ああ。それが？」

『こちらもそこに拠点を置いて良いか？』

「良いけど、俺の拠点からちょっと離れたほうが良いかもな。うるさいから。」

『まあ、良いんだろ？』

「ああ。」

『今からそこに向かう。だからなんか目印置いてくれ。出来れば夜でも分かる物でな。』

「分かった。」

『ガチャ』

夜でも分かる物？電気でいいかな。

懐中電灯の電源をオンにして、入り口に2つ置いておいた。

これで、無事に着くだろう。

13 視察と拠点地（後書き）

久しぶりに長いの書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8086y/>

大海賊時代を変える漂流者

2011年12月3日17時57分発行